

群 教 セ	I01 - 04
	平 15 . 217 集

特殊学級における学級経営改善の試み

- 児童の実態把握から授業実践までの流れを通して -

特別研修員 北村 哲也 (富岡市立高瀬小学校)

《研究の概要》

特殊学級の担任には、知識や経験の不足などから、児童生徒の実態把握や目標の設定、年間計画の立案などに自信が持てない教員も多い。本研究では、児童の実態把握から各指導計画の作成、授業の実践・評価までの一連の過程を通して、学級経営全般の見直しを行った。その結果、より効果的な指導を行うためには、詳細な実態把握と、子どもの良さを生かす指導計画の作成に基づいた実践・評価が必要であることがわかった。

【キーワード：特殊教育 知的障害特殊学級 実態把握 指導計画 学級経営】

研究対象 小学校知的障害特殊学級（児童数 男子 4 名）

主題設定の理由

特殊学級には、障害の種類や状態、発達段階などの異なった児童生徒が在籍している。その中で、各自の能力の向上や自立、集団生活への適応に向けて日々学習を進めている。障害の多様化や社会の変化等により児童の教育的ニーズも多岐にわたっており、一人ひとりが生き生きと活動し成長できるようにするためには、個々の児童の教育的ニーズを的確に把握し、指導に反映させていく必要がある。

特殊学級の担任は、1～2年の短いサイクルで交代することが多く、特殊教育未経験あるいは経験の少ない教員が担任となることが多い。また、障害児やその指導法などの基礎知識も乏しい状態で指導を進めなければならないため、児童への接し方や具体的な指導の仕方などで戸惑うこともある。特に重要な実態把握や指導方針の決定が十分でないまま指導をスタートすることもあり、そのような場合には試行錯誤が多く効率的に指導が行えないことが多い。

一方、研修員としての自分自身は、特殊学級を担任して3年目になる。今年度の学級は、2名の児童が卒業し、新たに2名の児童が新1年生として加り、児童数4名、担任1名、助手1名の構成で新学期をスタートした。これまでの2年間は、観察や保護者の意見等にもとづいた学級経営を心掛けた結果、児童個々の能力の伸長や学級集団としての向上という面では一定の成果があったと考えている。しかし、児童に対する指導が効果的に行われているのかどうかという点に日々不安を抱えながら指導を行ってきた。

以上の点を踏まえ、実態把握から指導計画の作成、授業の実践・評価までの一連の過程を通して、学級経営全般の見直しを行いたいと考え、本主題を設定した。

研究目標

今までの学級経営を見直し、より良い指導が行なえるようにするためには、どのような点に留意したらよいかを実態把握から各指導計画の作成、授業の実践・評価までの一連の過程を通して明らかにする。

研究内容

1 基本的な考え方

(1) 学級経営についての考え方

特殊学級での指導を効果的に行うためには、児童生徒の実態をより詳細に把握し、一人ひとりの実態に即した指導を心掛けていかなければならない。実態把握のためには、様々な観点で児童生徒の生活全般をよく観察するとともに、面談や諸検査などを通してより多くの情報を集めるなどして、児童生徒を多面的にとらえる必要がある。実態把握を基にして、個々の児童生徒の長期あるいは短期の目標を設定する。その際、児童生徒本人や保護者・教師の思いなども考慮することが必要である。各児童生徒の目標を考慮した上で、学級の目標を設定する。個々の目標やその教育的ニーズは同一ではないので、学級の目標はそれぞれの目標が最大限生かされる形を考え、設定しなければならない。

実態把握を基にして定められた個々の目標や学級の目標が最大限に達成できるよう、教育課程を編成し、指導方法を工夫し、教育環境を整えるなどして教育活動を行っていく。その際に、目標の異なる児童生徒が、互いに良い影響を与え合い向上し合えるよう心がけていかなければならない。

教育課程編成の過程を通して、個々の児童生徒の目標達成と学級集団としての向上を図り教育活動を実践していくことを学級経営と考える。

(2) 作成する資料

・実態資料　・個別の指導計画　・年間指導計画　・単元の指導計画　・学習指導案

(3) 主に参考にする資料

・総合教育センター発行物　・雑誌　・その他（養護学校等の「個別の指導計画」の様式）

研究の計画

月	内 容
4・5月	児童の実態把握
5月	個別の指導計画作成、年間指導計画作成
9月	個別の指導計画の評価
10月	研究授業（生活単元学習）
1月	個別の指導計画の評価
3月	次年度に向けての引継ぎ準備

実践の内容

1 児童の実態把握と考察

児童の実態をどこまで把握し指導に反映させることができるかによって、実際の指導の成果も大きく異なる。そのため、まず児童の実態把握を以前より細かく行うよう心がけた。その際、「ここまではできる」「このような支援をすればできる」という視点からの観察や保護者との面談を行い、資料を収集した。また、児童の活動に対してのチェックリスト表の作成・活用も行い、児童理解のための参考とした。

それらを基にして児童及び学級の実態をまとめた。研究としては実態把握の手法を考察した。

(1) 実態把握のための資料（児童 B を中心に例示）

①観察記録

年月日	内容	コメント
4月10日	教室の入り口付近で遊んでいたが、おどおどして遠ざかろうとする。4月は遊ぼうと目覚めが弱く、おどおどして遠ざかろうとする。4月は遊ぼうと目覚めが弱く、おどおどして遠ざかろうとする。	観察
4月20日	授業中、口を閉じておくまわりの視線を気にしていたが、授業中が静かです。授業は、2週間以降は授業中の視線を気にせず、よく話を聞いている。	
4月30日	授業中、「おどおどしなくなるみたい」と褒められる。おどおどしなくなる。おどおどしなくなる。おどおどしなくなる。	
5月10日	授業中、先生の話を聞いていたが、おどおどしなくなる。おどおどしなくなる。おどおどしなくなる。	
5月20日	授業中、先生の話を聞いていたが、おどおどしなくなる。おどおどしなくなる。おどおどしなくなる。	
5月30日	授業中、先生の話を聞いていたが、おどおどしなくなる。おどおどしなくなる。おどおどしなくなる。	

②保護者からの情報（家庭訪問時）

- おどおどしなくなるようになってきたが、おどおどしなくなる。おどおどしなくなる。
- おどおどしなくなる。おどおどしなくなる。おどおどしなくなる。
- おどおどしなくなる。おどおどしなくなる。おどおどしなくなる。
- おどおどしなくなる。おどおどしなくなる。おどおどしなくなる。
- おどおどしなくなる。おどおどしなくなる。おどおどしなくなる。

③チェックリスト

項目	内容	チェック結果		
		○	△	×
1	授業中に発言する。	○		
2	授業中に発言する。	△		
3	授業中に発言する。	△		
4	授業中に発言する。	△		
5	授業中に発言する。	○		
6	授業中に発言する。	○		
7	授業中に発言する。	△		
8	授業中に発言する。	△		
9	授業中に発言する。	△		
10	授業中に発言する。	△		

(2) 児童の実態の概要

平成 15 年 5 月	
A	略
B	<p>知的障害（軽度）。学級内では活発で、元気に活動することができる。</p> <p>友達をたたいたりつねったりすることもあるが、友達と関わりたいという気持ちが強く、友達の活動の様子を見たとその場に出向き、手を貸したり代わりにしてあげたりするなど、友達の面倒を見てあげることも多い。</p> <p>ある程度活動に慣れ自信がもてると意欲が増し、「かるたをしよう。」など自分からやりたい遊びを提案したり、一定時間その遊びを続けたりすることができる。</p> <p>学習面では、鉛筆の持ち方が不安定で筆圧が一定していないため、書く字の形や大きさも安定しないが、ひらがなは半分程度のものを読むことができ、自分の名前を書くこともできる。数を数えることは好きでよく行っているが、一位数の数の数え方はまだ定着していない。特に身体活動が伴う場面では、行動が気持ちの変化で大きく左右され「自分が集団の中で一番になれない。」「他の子と比べて上手にできない。」などのことを感じた場合には、活動が停滞してしまったり取り組めなかったりする様子も見られる。</p> <p>協力学級や通学班など大きな集団の中ではおとなしく、活動が消極的になることもあるが、A がいることにより精神的にも安定し、活動に取り組むことができるものもある。主に音楽・体育で参加している協力学級での授業では、場合によっては分からないことでもある程度は友達の行動を見て同様に活動することができる。</p> <p>保護者の回答による「乳幼児精神発達質問紙」検査では、生活年齢 6 歳 5 カ月で、運動（6 歳）、社会（5 歳）生活習慣（7 歳）に対し、探索、言語がともに 3 歳半と低い値が出た。</p>
C	略
D	略

(3) 学級の実態

1年生男子2名(A・B)、4年生男子1名(C)、5年生男子1名(D)の計4名が在籍する知的障害特殊学級である。4名の児童を担任と助手の2名で指導している。昨年度まで在籍していた2名が卒業し、新たに2名が入学したため、児童の学級内での役割も大きく変化した。まだ集団としてのまとまりについては流動的であり児童間の年齢等における逆転現象もあるなど能力差も大きい。児童間では学級内でのリーダーなど自然発生的な役割もまだ決まっていない。係の仕事を意識的に他の子がやってしまったたり、係が決まっていない仕事の取り合いをしたりなどの小さなトラブルもある。

平成 15 年 5 月

(4) 児童の実態把握に関する考察

児童の実態把握は、担任による観察の他、生育歴や生活の様子、子ども自身の思いや願い、保護者や前担任、協力学級担任からの情報、諸検査、医学的所見等を基にして行った。以下にどのような方法で児童の実態把握を行い、どのようなことが明らかになったかを述べる。

ア 実態把握の方法について

観察では、学校生活での様子を「この時間帯にこういう場面でこういう行動をした。」といったように細かく記述した。保護者に伝えられる部分は連絡帳に、その他の部分は記録ノートにと分けて記述したため、煩雑になってしまったが、連絡帳も併せて活用することにより、児童の実態把握を保護者と共有したり認識の違いを埋めたりできるというメリットもあった。

観察の際には、視点を持って一緒に遊ぶというアプローチも大切であることがわかった。それを通して、児童の興味・関心があるものを発見できるとともに、一緒に楽しむことや待つ姿勢、声かけのタイミング、各児童の持つ行動パターンなどにも目を向けることができた。

チェックリストの項目は、一日の活動から選び出して作成した。評価の際は、「ここまではできる」「このような支援をすればできる」という視点でチェックすることで、より細かな実態把握が行えた。その結果、児童の課題を意識した指導につながる実態把握が行えた。

チェックリストは、細かな実態把握が行えるとともに、保護者との面談で活用することにより、児童に対する保護者との共通理解を深めることができた。例えば、児童の日常生活での課題や目標の設定・具体的な方策などについては、家庭と学校とで同一歩調で取り組めたなどの面で効果をあげることができたと考える。

検査等により発達段階や精神年齢を客観的にとらえ、それを指導の目安とすることができた。検査の実施については、比較的専門的な技能を要しない「乳幼児精神発達質問紙」を使用した。この検査の活用により、担任と保護者との間で児童理解の差異が確認でき、それを基に話し合う機会を持つことで教師と保護者との共通理解を図ることができた。

協力学級担任等の情報から、特殊学級と異なった場での児童の姿をつかむことができた。情報交換を定期的に行えるとよい。

イ 障害児の発達段階についての考え方について

知的障害や情緒障害の児童は、各自の持つ能力が一様に未発達なのではなく、ある特定の分野で得意なことや苦手なことがある。そのため予想していた発達段階に照らし合わせた指導内容や方法では効果的な指導が行えない場合も多い。また、例えばわずかな環境の変化でそれまでできなかったことができるようになる場合や、その逆の場合も多く見られる。活動を行う際の提示の方法や順番等を変えただけで意欲に差が出る場合も多い。それらも考慮した上で個々の児童の特性を細かく把握し、指導を進める必要がある。各単元や一つ一つの活動について、その達成状況や達成するまでの活動の頻度等に目を向けていくことで、それぞれの児童についてより深く理解することができると考える。

のような目標を立て、どのような指導を行なっていくかという内容を記述し、実際の指導に生かせるものを作成していく必要があると考える。

個別の指導計画作成に関する情報も少なく、様式や作成の手順が分からなかったが、特殊教育指導資料第14集『新しく特殊学級の担任になった人のためのQ&A・101』や雑誌等にある作成の手順や様式例を参考にすることで、作成する際のイメージを持つことができた。

個別の指導計画は、様式にこだわらずに作成してみることが大事であると考え。それを活用していく中で、必要な項目や記述内容も決まってくる。必要に応じて改定する作業を進めることにより児童理解も深まり、指導に生かすことができたと考える。

イ 個別の指導計画の必要性

児童の障害の種類や発達段階など個人差の大きい特殊学級では、個別学習や各自の役割を設定した集団学習が主となる。同じ教科を学習する場合でも個々の児童の学習内容や形態は異なるため、同じ教材を扱っても目標や課題も個々に設定する必要がある。指導をより効果的に行うためには、個々の児童に対して、実態把握に基づいた目標を設け教育課程を設定しなければならない。そのために個別の指導計画を作成し活用することが必要であると考え。

それまでの指導では学級経営案に大まかな課題を記した程度だったため指導内容も焦点化されず効果的な指導が行えなかった。個別の指導計画を作成することにより目標が明確になり、どの場面でどのような指導を行うかについての意識を持つことができ、目標の達成状況や指導法について細かく見ることができた。

個別の指導計画の作成は、児童の将来を見据えた継続的な指導のための基礎資料ともなるので、熟慮して作成しなければならない。また、協力学級の担任をはじめとする特殊学級児童生徒の指導に関わる職員に対して共通理解を図るための資料ともなり、指導体制を整えるうえでも役立つと思われる。

個別の指導計画を作成・活用し資料を残していくことで、指導の継続性や充実が図られる。担任が交代する場合にも指導の継続性が図られるとともに、新担任の指導に関する不安解消の一助にもなる。

3 年間指導計画の作成と考察

(1) 年間指導計画の作成

児童の実態把握や個別の指導計画を基に、各児童の目標やその達成のために必要な課題を考え、それらが最大限生かされるように単元を構成し、年間指導計画を作成した。それまでは、以前の年間指導計画を踏襲し、学習内容を各児童の実態に合わせた形で指導を行っていた。今年度は、個々の児童や学級の実態把握、個々の指導目標の設定、学級としての指導目標の設定、という段階で年間指導計画の作成を進めたことにより、単元の設定・構成がより具体的に考えられ、個々の児童や学級集団に即した計画を作成することができた。

ア 年間指導計画一覧表

月	年間行事	児童生活の指導	生活単元学習	生活・社会	国語	算数	音楽	体育	
4	・始業式 入学式 ・交通安全教室 ・授業参観	朝 の 一 日 の 生 活 ・身の回りの整理 ・交通安全 ・給食 の 生 活 ・遊ぶがさ ・そうじの仕方 ・身だしなみ の 生 活 ・休みの時間	・買物に行く ・お店ごっこをしよう	○○○市の人を招待して、 ジャガイモ料理をこも そうしよう ・ジャガイモ料理の作り ・招待状の作成 ・じゃがいもパーティー	A 1 学期 ひらがなの習得 読み聞かせ	1 学期 算数の数え方	主 と し て 協 力 学 級 ・ 学 年 の	主 と し て 協 力 学 級 ・ 学 年 の	
5	・第1回説明会		・地域の行事		・ジャガイモ料理の作り ・招待状の作成 ・じゃがいもパーティー	2 学期 簡単な漢字の習得 書写、読み聞かせ等			2 学期 算数の数え方 時計を扱う
6	・プール開き ・オープンスタール		・遊ぶがさ ・そうじの仕方 ・身だしなみ		・遊ぶがさ ・そうじの仕方 ・身だしなみ	3 学期 簡単な漢字の習得 書写、読み聞かせ等			3 学期 算数の数え方 加減の計算
7	・終業式		・休みの時間		・遊ぶがさ ・そうじの仕方 ・身だしなみ	ひらがなを習得して、さつ ま芋パーティーをしよう ・さつま芋作り			B 1 学期 平假名の習得 簡単な計算

イ 生活単元学習年間指導計画

生活単元学習 年間指導計画

○○○立○○○学校 ○○組

1. 児童の実態

本学級には、A、B、C、Dの4名の児童が在籍している。学年もすべて授業の進度や程度も異なる程度にも大きな差が見られることもあり、学級に於ける役割にもばらつきがある。4名とも言葉の発達には思っていることや自分のやりたい活動など言うことができる。しかし話し合いの場面では、A・B・Cは自分の考えが通らないと、黙っていても退席が多かったりという様子も見られる。Dはアイディアも豊富で、人前での発表も好き、協同学習などでもよく行っていることもあり、話し合いの場面でも多くの意見を述べることができる。そのため、この考えが学級の輪郭になることも多く、A・B・Cについては活動内容をよく聞き、活動についての考えを持ち、異議であるよう主張していくことが必要である。また、作業などについては、C・Dはある程度進められた活動には熱心に取り組むことができるが、A・Bはまた学校生活に慣れていることもない活動への取り組みには弱みがある。学級集団として、活動を通してまとまりを持たせる必要がある。全学年の活動を持っているが、実施に定まることが難しいといった様子も見られる。それぞれの強みから以下の目標を立て計画を作成した。

2. 年間の指導目標

○学習を進める中で、友達と意見を多くに自分の意見を発表したり活動を進めたりすることを通して、仲間意識や進歩感も促される。

○活動の目的を理解し、意欲的に活動する姿勢を育てる。

○学習を通して身につけた事項も、生活の中で役立つ経験に基づける。

3. 年間指導計画 (週ごとの計画)

月	進め方	時間	主な学習活動
4	・資料を見よう	2	・資料計画を立て必要な資料をメモに記入する ・メモを基に資料を作る
4	・お菓子をつくろう	5	・スーパーで買っているお菓子を調べる ・お菓子の人、お菓子の役割を知る、練習する ・お菓子のレシピを作る
5	お菓子作り体験	6	・資料計画の進捗を見たり知っている事を確認しあったりしながら、練習計画を立てる ・練習をする
6	・お菓子作り体験	6	・練習を基に完成したお菓子を作る
7	・お菓子作り体験	3	・お菓子の作り方を調べる ・お菓子の作り方を調べる ・お菓子の作り方を調べる
9	・お菓子の作り方を調べる	4	・お菓子の作り方を調べる、家で調べたりする資料を調べる ・お菓子の作り方を調べる、家で調べたりする資料を調べる ・お菓子の作り方を調べる
10	・お菓子の作り方を調べる	4	・お菓子の作り方を調べる、家で調べたりする資料を調べる ・お菓子の作り方を調べる、家で調べたりする資料を調べる ・お菓子の作り方を調べる
11	・お菓子の作り方を調べる	3	・お菓子の作り方を調べる、家で調べたりする資料を調べる ・お菓子の作り方を調べる、家で調べたりする資料を調べる ・お菓子の作り方を調べる
12	・お菓子の作り方を調べる	4	・お菓子の作り方を調べる、家で調べたりする資料を調べる ・お菓子の作り方を調べる、家で調べたりする資料を調べる ・お菓子の作り方を調べる
1	・お菓子の作り方を調べる	4	・お菓子の作り方を調べる、家で調べたりする資料を調べる ・お菓子の作り方を調べる、家で調べたりする資料を調べる ・お菓子の作り方を調べる
2	・お菓子の作り方を調べる	1.0	・お菓子の作り方を調べる、家で調べたりする資料を調べる ・お菓子の作り方を調べる、家で調べたりする資料を調べる ・お菓子の作り方を調べる
3	・お菓子の作り方を調べる		・お菓子の作り方を調べる、家で調べたりする資料を調べる ・お菓子の作り方を調べる、家で調べたりする資料を調べる ・お菓子の作り方を調べる

(2) 年間指導計画作成に関する考察

ア 年間指導計画の作成について

年間指導計画は、学級集団の活動として構成されたものであるため、そこには児童の実態や目標を達成するために必要と思われる学習内容が単元として配列される。個々の児童の実態や目標と学級集団としての実態や目標が統合され、最大限に生かされることが必要である。

年間指導計画を毎年新たに作成することにより学習活動が明確化され、単元や一時間の指導計画をより具体的に考えることができる。年間指導計画は、単元や一時間の指導が効果的に行えるように構成し、実際の指導に役立てていけるものでなければならない。

特殊教育指導資料第15集『知的障害特殊学級における指導計画の作成』では年間・単元・一時間の指導計画が例示されているので、作成する際の具体的なイメージが持て、作成に生かすことができた。

特殊学級の学習では合科的に学習を進めることも多いので、年間指導計画一覧表を活用していくことで、他の学習との関連を図ることもできると考える。

イ 年間指導計画の改訂について

特殊学級に在籍する児童生徒は実態や発達段階が多岐にわたり、前年度までとは目標や具体的な活動内容が異なる。同様の活動を行う場合においても、以前のものと継続性を持ちながらも、その段階での実態把握を適切に行い、年間指導計画を作成し、個に応じた指導に生かしていかなければならない。

ウ 年間指導計画作成における個別の指導計画の活用について

それまでの指導では、個々の児童の目標設定が不十分で、ある児童にとっては既に達成された目標であったり、逆に多くの支援を行っても目標が達成されなかったりと、効果的な目標設定や指導が行えていない場合も多くあった。しかし、年間指導計画を作成する際に個別

の指導計画を活用することにより、各児童の目標や伸ばしたい力を細かく考えることができた。学級の児童が同じ活動を行う場合においても、それぞれの児童に合った活動を考え指導を進めることができた。

年間指導計画には、個人の目標などを集団の活動として最大限生かせる形で具体化し、指導に生かしていく必要がある。個別の指導計画を活用することにより、個と集団の目標や学習内容を年間指導計画により反映させることができる。

4 個別の指導計画の評価()に関する考察

個別の指導計画は、学習活動がより効果的に行われるよう、例えば単元のものであれば、その単元の学習前、学習過程、学習後など、日々の実践の中で評価を行っていく。個別の指導計画を作成する過程での実態把握が不十分であったり適切でなかったりという場合などは、それらが分かった時点で個別の指導計画を再考し内容を改めていく必要が生じる。今年度は、1年生の児童の実態把握が十分でなかったため、比較的早い時期に目標が達成されたり、学習を進めるうちに困難な目標設定をしてしまっていたことがわかったりするなど、指導を進めていくうちに早い段階での修正を行った。また、学級内での人間関係が作られる過程でその児童の新たな面を発見することもあるなど、児童理解を深めるにつれ目標を修正する必要が出てきた。

個別の指導計画の評価は、多くの場合、一定期間を置いてそれまでの指導を振り返り、評価していくことになる。特に学期の変わり目は、通知表の作成や学級経営案での学級経営の評価などを行う時期とも重なるので、比較的資料も多い。児童の学習活動前と後との変容の様子も把握しやすく、それにあわせて個別の指導計画の評価も行いやすい時期である。また、長期休業中の児童の変容も予想されるので、休業明けの児童の観察や保護者からの情報などを考慮し、効果的な指導が行えるよう必要に応じて個別の指導計画を見直していく必要がある。今年度は、学期途中に弟が生まれたため学校生活でも退行現象が見られた児童や、夏季休業中に親子で家庭学習に取り組み教科の面で大きく伸びがみられ自信を持って活動できるようになった児童もいた。それらのことから、人間関係や活動面での変化も見られたため、個別の指導計画の記述内容を修正した。

5 授業(生活単元学習)の実践と考察

指導計画に基づいて、『カレーパーティーを開こう』の単元で授業実践を行った。中心となるカレー作りでは、一人ひとりが活動に見通しを持ち、自分の力でカレー作りをすることを目標に学習に取り組んだ。カレーは全員が好む料理であること、調理にも興味を持って取り組めること、児童の実態にあわせて調理の手順を簡素化したり複雑化したりできること、調理の手順の中で各自の工夫を生かせることなどの理由から生活単元学習の中で扱い、単元を構成した。

(1) 授業実践の経過

ア 第一次(計画作り)

先を見通して行動する力や自分ひとりの力で課題を解決する力を身に付ける目的でカレー作りという活動を提案した。児童と「職員室で給食を食べる先生にカレーをご馳走する」という目標を設定し、活動の計画を話し合った。実際のカレー作りについては、低学年の児童や細かい作業が苦手な児童もいるため、調理の方法や手順を簡素化し、教師が調理しながら手順を示し、全員で試食し、意欲化を図った。

イ 第二次(カレー作りの練習)

第1回……初めての調理では、児童によっては常にそばにいて手を添えて調理するなどの支

援が必要な場合もあった。手順を確認する意味もあり、全員同じペースで調理の手順を記したイラストを見ながらの作業となった。そのため時間はかかったが各児童の調理への取り組み方がわかり、以降の指導の基礎資料となった。

第2回……児童が見通しを持って自分の作業に取り組むことができるよう、レシピ(作り方の資料)を見ながら調理を進めることとした。個々に絵本という形でレシピを配布し、児童はそれを見ながら自分のペースで調理を行った。

第3回……それまでの2回の学習を通して、各児童の実態に応じてレシピの一部を改定した。レシピを各児童の実態に応じた形で提示することで、自分の活動に対する意識が明確になり、先を見通した活動がスムーズに行えるようになってきた。

生活単元学習 学習指導案

1 題材名 カレーパーティーをしよう

2 児童の理解
本単元には、A、B、C、Dの4名の児童が登場している。各児童は自分の役割を持って活動している。活動には、各自の役割を分担して取り組む必要がある。児童はそれぞれの役割を分担して活動することにより、活動の目的を理解し、自分の役割に合わせた活動を行うことができる。そのため、活動開始から終了までの間、集中して活動に取り組むことができる。

3 本時の学習
(1) 目標
(目的)
・作り方を思い出したりレシピを見たりしながら、見通しを持って作業することを通して、一人で自分のカレーを作る。
(内容)
・カレーレシピを見て目的の作業を確認しながら、カレー作りに取り組む。
・カレーレシピを見たり手順を思い出したりしながら、カレー作りを進める。
・カレーで考えた変更や追加事項を記したレシピで手順を確認したり、手順を思い出したりしながら、自分の工夫を生かしたカレーを作る。
・カレーレシピを見て自分が行なう作業を知り、必要な道具・材料を準備しながらカレーを作る。
(2) 準備
児童→量り器(レシピ、なべ、材料(きんぴら、コンソメ、ジャガイモ、肉類、カレー粉)、調味料(塩、ま늘粉、味噌、おたま、ボール、皿、台布)、水切り籠(4人分)
(3) 展開
①-実践及び留意点 ②-評価

時間	学習活動と指導				【】内: 評価基準
	全体	C	B	A	
15分	・カレー作りを始めること を確認し、調理の順番を 確認する。 【絵本の順番 を確認し、調理の 順番を確認する。 【絵本の順番 を確認し、調理の 順番を確認する。】	・カレー作りを始めること を確認し、調理の順番を 確認する。 【絵本の順番 を確認し、調理の 順番を確認する。 【絵本の順番 を確認し、調理の 順番を確認する。】	・カレー作りを始めること を確認し、調理の順番を 確認する。 【絵本の順番 を確認し、調理の 順番を確認する。 【絵本の順番 を確認し、調理の 順番を確認する。】	・カレー作りを始めること を確認し、調理の順番を 確認する。 【絵本の順番 を確認し、調理の 順番を確認する。 【絵本の順番 を確認し、調理の 順番を確認する。】	・カレー作りを始めること を確認し、調理の順番を 確認する。 【絵本の順番 を確認し、調理の 順番を確認する。 【絵本の順番 を確認し、調理の 順番を確認する。】

・先の特 業への 見通し を持って 一人で カレー を作る。 自分の ペース で進め る。 【目標と 手順を 確認し、 自分の ペースで 作業を 進める。 【目標と 手順を 確認し、 自分の ペースで 作業を 進める。 【目標と 手順を 確認し、 自分の ペースで 作業を 進める。】	・カレー作り の手順を 思い出したり 本を見たり して、自分の ペースで 作業を進 める。 【目標と 手順を 確認し、 自分の ペースで 作業を 進める。 【目標と 手順を 確認し、 自分の ペースで 作業を 進める。】	・自分で工夫 した点等 をレシピの 記述で 確認しな がら、カレー を作る。 【目標と 手順を 確認し、 自分の ペースで 作業を 進める。 【目標と 手順を 確認し、 自分の ペースで 作業を 進める。】	・レシピで確 認した手順 を思い出 したりしな がら、カレー 作りを進 める。 【目標と 手順を 確認し、 自分の ペースで 作業を 進める。 【目標と 手順を 確認し、 自分の ペースで 作業を 進める。】	・レシピで 作業の手 順を確認 しながら、 カレー 作りを進 める。 【目標と 手順を 確認し、 自分の ペースで 作業を 進める。 【目標と 手順を 確認し、 自分の ペースで 作業を 進める。】	・レシピで 作業の手 順を確認 しながら、 カレー 作りを進 める。 【目標と 手順を 確認し、 自分の ペースで 作業を 進める。 【目標と 手順を 確認し、 自分の ペースで 作業を 進める。】
---	---	---	--	---	---

第4回……手順を思い出したりレシピを見たりしながら調理することができ、先を見通して活動することができはじめた。児童も自分ひとりの力でカレーが作れるという自信も持つことができ、自ら活動するという意識を強く持つことができた。

第5回……保護者への活動の紹介を兼ねて、日曜参観の授業として行った。

ウ 第3次(カレーパーティー)

児童の目標が、「職員室で給食を食べる先生にカレーをご馳走する」というものであったため、意欲的に活動することができた。カレー作りについても、各児童が自分の活動に見通しを持って取り組むことができた。

(2) 授業(生活単元学習)の実践に関する考察

この単元は、カレー作りを通して、先を見通して活動する力や自分ひとりで課題を解決する力を身に付けることを目的として行った。その際の支援として、児童がそれぞれの実態に

応じて活動することができるようにするため、個々の児童の実態にあわせて調理の手順や材料を調整した。また、調理の際に、先を見通して活動するための教材として、文章のみのプリント、絵本、「めくりカード」など各児童の実態に即したレシピを作成した。個々の児童の実態を細かく把握し、それに応じた支援を行うことで、効果的な学習が行えたと考える。

以前はいろいろな体験をすることを重視して、学校行事を中心とした幅広い活動に短期的に取り組む単元構成が多かった。今回、児童一人ひとりが、活動に見通しを持って取り組むことができるようになることを目標に単元「カレーパーティーを開こう」を新たに設定した。今回の授業実践から、一人ひとりの児童が見通しを持って活動に取り組めるようになるためには、教師の予想する以上に繰り返し取り組む時間の確保や実態にあわせた教材の工夫が必要であることを改めて感じた。

まとめと課題

1 まとめ

(1) 児童理解について

児童理解や実態把握という面では、それまでの「できる」「できない」という二元的な考え方から「どの程度の支援で課題をどのように達成できるか」という方向に目を向けることができるようになった。児童一人ひとりの実態をより詳しくとらえることができたため、支援も個々の児童に即した方法を考えられるようになった。以前は各児童の実態の違い等から取り組むことを躊躇していた学習内容も、それぞれに必要な支援を考え、過程を細分化して取り組めるようにするなどして、学習を進めることができた。

(2) 個別の指導計画や年間指導計画の作成について

児童の実態把握とそれにもとづいた個別の指導計画の作成は、より個に即した指導を進める上で重要であることがわかった。それまでは、観察から得た浅い児童理解を基に指導目標を設定することが多く、期待する児童像や指導に具体的なイメージが持てなかったために、支援の方法も限られ、効果的な指導が行えなかった。個別の指導計画を作成する過程を通して、より細かな児童の実態把握ができ、それをもとに個や集団に即した指導目標の設定や計画立案が行え、指導に生かすことができた。

年間指導計画については、それまでは以前から使われているものに朱を入れるなどして活用していたので、児童の実態に合わない単元もあり、効果的な指導が行えない場合もあった。個別の指導計画を作成することにより、児童理解を深めることができ、各児童の目標をより個に応じた形で設定することができた。そのため、各児童や学級としての活動のイメージが持て、新たに年間指導計画を作成し指導に生かすことができた。

生活単元学習での『カレーパーティーを開こう』では、児童が自分の活動に見通しを持って取り組む姿勢を育てることを目標に単元を設定した。それまでの学習では経験することを主眼として単元を構成していたため、見通しを持って活動に取り組む姿勢を育てるという視点に欠ける指導になりがちであった。この単元では、児童の実態を細かく考察し、目標を達成するために各児童の実態にあわせた支援が行なえるよう心がけた。学習では、徐々に教師の直接の支援を減らしても活動することができるようになり、見通しを持って活動に取り組む姿勢の向上が見られた。単元や一時間での活動に際して、個々の児童に適した指導計画を作成することにより、効果的な指導を行なうことができたと考える。

2 課題

児童理解を深めることで、個々の児童に対してより適切な目標の設定と支援の工夫ができた。今後も児童の実態を細かく多面的に見る目を養い、児童理解を深めていかなければならない。あわせて、単元や一時間における個々の児童に即したきめ細かな指導を行っていくために、その時々々の児童の実態や状態を十分に把握し、目標の設定や支援の工夫を充実させる必要がある。

< 参考文献 >

- ・ 特殊教育指導資料第 14 集 『新しく特殊学級の担任にたつた人のための Q&A・101』
第 15 集 『知的障害特殊学級における指導計画の作成』
群馬県総合教育センター
- ・ 雑誌 『実践障害児教育』 学研 2002 年 4、10 月、2003 年 5 月
『発達の遅れと教育』 日本文化科学社 2002 年 2、5、6、7、9 月、2003 年 4 月
『障害児の授業研究』 明治図書 2002 年 10 月
- ・ 全国知的障害養護学校長会 編著 『新しい教育課程と特殊教育』 東洋館出版社
- ・ 県内養護学校等の個別の指導計画
- ・ インターネットでの検索（各教育センター HP や日本発達障害支援システム学会の HP（<http://www.jasssdd.crg/IEP/>）など）